

# MICE Japan

APR. 4  
2014



**BAU**

CONGRESS CHINA 2014

中国国际建筑科技大会及展览

7月8-9日・北京・国家会议中心

[www.bauchina.com](http://www.bauchina.com)



Messe München  
International

MICEアンバサダー特別座談会



# JAPAN MICEの強化に必要な 産官学民のプロフェッショナルな連携

左から松山理事長、長村教授、大西会長、川島代表

## アメリカでのMICEは 26兆円規模の「産業」

川島 昨年来、大型の国際会議誘致に次々と成功を収めるわが国では、全国的に国際会議、MICEへの認識、取り組み意識が高まっています。

しかしその一方で、2012年のICCA統計に基づいて国際会議開催件数を都市別にみると、1,300万人の人口を擁する東京がシンガポールやソウルはもとより、270万人の台北より順位は下です。かといって開催件数そのものが減っているわけではなく、アジア各都市・各国の台頭により、日本は相対的にその順位を下げているのも現実です。

こうした油断できない状況を踏まえ、観光庁や日本政府観光局では国際競争力強化に向けた戦略的な取り組みを積極的に展開しており、その一環として昨年12月、MICEアンバサダープログラムが始動しました。

本日は就任された8人のアンバサダー

を代表して日本学術会議の大西会長と国際医療福祉大学大学院の長村教授、またアンバサダープログラムの発足と運営をご担当される日本政府観光局の松山理事長にお集まりいただき、プログラムの目的や国際会議誘致・開催における課題などをお話いただきたいと思います。

まずは、松山理事長よりナショナルプログラムとして発足したMICEアンバサダープログラムの背景、目的、アンバサダーの役割や期待についてお聞かせください。

松山 経済や産業、また都市のプランディング等に大きな効果を発揮するMICEへの取り組みが世界中で活発化する中、アジアにおける日本での国際会議開催件数シェアは90年代の約半分です。この状況に私たちも危機意識を強くし、政府に対しても多くの人や優れた知見、投資を呼び込むツールとしての「MICE」の重要性を訴求してまいりました。またMICEは、アメリカでは26兆円規模もの巨大な「産業」として認識さ

れ機能しています。日本においても、「産業」として位置づけと取り組みが大変重要であると呼び掛けております。そして昨年6月に閣議決定された「日本再興戦略」により、国を挙げた「MICEの国際競争力強化」に向けたアクションが始動しました。これを受けて誕生したMICEアンバサダープログラムは、MICEを戦略的に誘致するために、学識豊かな方々に「日本の顔」として広報活動や誘致活動に寄与していただくことにより、潜在的な需要の掘り起こしをめざしたナショナルプログラムです。ただMICE、特に国際会議の誘致は都市間競争であり、将来的には諸外国同様、都市のプログラムとして機能してゆくことが望ましいとも考えています。

川島 欧米で始まり、アジアや中東をはじめ全世界に広がっているアンバサダープログラムは、都市単位で地域のキーパーソンをアンバサダーに認定し、国際会議誘致に向けてさまざまな支援を提供することで、積極的に国際会議を誘致いただく、また専門分野で活発

な活動を展開いただくとするプログラムです。プログラムとしての成果が、世界的な広がりをお押ししていますが、日本ではまずは国が取り組み、「国際会議開催国としての日本」への勢いにつなげ、成果を示してゆきたいと言う松山理事長のお話でした。

ここで、大西先生から自己紹介を兼ね国際会議との関わりをお聞かせいただきたいと思います。

大西 私の専門領域は、都市計画です。この領域は、実は国際会議がそんなに数多くあるわけではありません。私にとって最大の会議は、昨年100周年を迎えた「IFHP (International Federation for Housing and Planning / 国際住宅・都市計画連合)」が毎年開催する会合で、10～15年に一度、日本でも開催されています。

しかし2011年10月、日本学術会議の会長に就任したことで、国際会議との関わりは大きく変わりました。日本学術会議は、内閣総理大臣の所轄のもと、政府から独立して職務を行う「特別の機

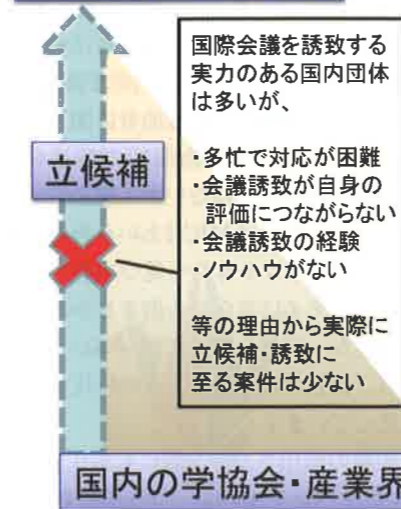
関」で、「科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること」、「科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること」を職務としています。またその役割は、I) 政府に対する政策提言、II) 国際的な活動、III) 科学者間ネットワークの構築、IV) 科学の役割についての世論啓発です。

活動の重要な柱の一つである国際活動の中でアカデミーの国際組織との連携を通じたさまざまな国際会議や関連イベントに参画するほか、年間7つ程度の国際会議を主催、あるいは共同主催しており、この中には皇室の方々にご臨席を賜る会議もあります。極めて会議を開催することの多い組織といえます。このように日本学術会議を通じて、MICE、特に国際会議に極めて深く関わるようになりました。

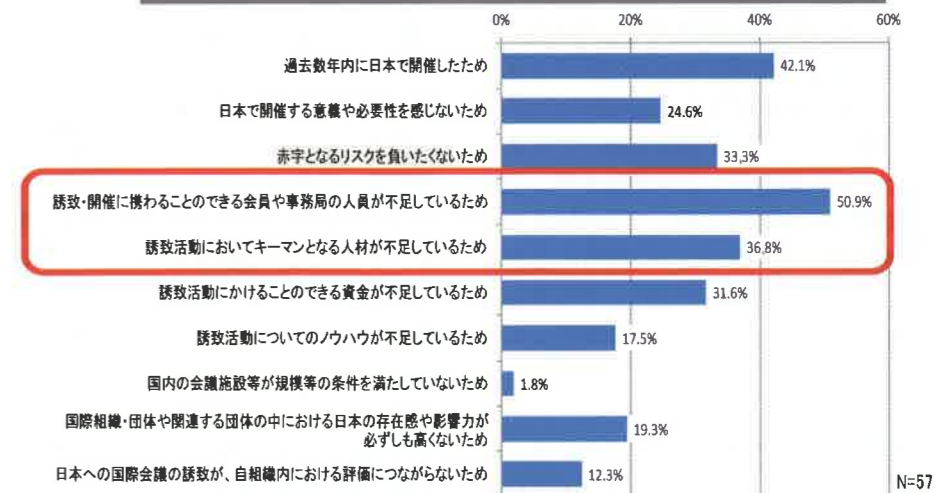
川島 ありがとうございます。わが国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野の約84万人の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議では、国際会議を主催もしていらっしゃる

## 学協会・産業界等の誘致立候補に向けた課題

### 誘致競争・開催決定



## 日本への誘致活動／立候補を行わなかった理由 (複数回答)



注)「決まった国・都市の間で順番に開催しており、誘致活動／立候補を行う余地や意味がないため」、「その他」の回答を母数から除いて集計

・多忙な大学関係者、産業界をサポートする体制・機能の強化が必要。  
・大学教授・産業界リーダー等の有力者からMICE誘致に対する協力が得られる環境整備が有効。

出所:「国際会議の日本への誘致に関するアンケート調査」(観光庁、日本政府観光局(JNTO)、日本コンgres・コンベンション・ビューロー(JCCB))



大西 隆氏

とのことです。次に、2016年の国際細胞学会の誘致に成功された長村先生にお聞きしたいと思います。

**長村** 2016年、横浜で開催する「第19回国際細胞学会 (ICC2016)」誘致にあたっては、日本政府観光局をはじめ多くの関係者に多大なご支援を頂きましたことに、改めて感謝申し上げます。

病理学・病理診断と細胞診断学を専門領域とする私は、日本病理学会と日本臨床細胞学会の2つの学会に所属しています。医学関係の学会は国際学会があり、病理関係では2年に一度の国際病理アカデミーがあり、日本では2000年に開催されました。国際臨床細胞学会は3年に一度開催され、2016年の開催は日本では3度目の開催となります。

2016年の開催は2010年のエジンバラ大会で、3度目の挑戦のオーストラリアとの競争の結果、わずかに1票差で日本への誘致が決定しました。誘致活動は、大変リードタイムが長い活動です。私たちが立候補を行ったのが2008年。つまり8年前には開催に向けて国内関係者の意識統一、組織としての機関決定を行い、さらに開催地を決定し、そこから海外に向けてプロモーションを展開していたのです。

**川島** 誘致活動では、オールジャパンのチーム活動も効を奏したそうですね。

**長村** 日本政府観光局、横浜市、横浜観光コンベンション・ビューロー、パシフィコ横浜、PCOの4者によるチームが誘致活動を支えてくれました。効果的なアプローチをはじめ、活動についてミーティングを重ね、大きな手応えを掴

んだジャパンナイト (プロモーション・パーティ) もオールジャパンで取り組みました。またエジンバラ大会の前年の2009年には3名のキーマンをサイトビジットに招聘し、会議開催、受入環境をご覧いただくとともに、外国の方々に人気の京都へも日帰りでのショートトリップが可能であることなどをアピールしました。後から、成田空港に向かう車の中で「日本で決まりだな」と言うようなお話が出たと伺いましたが、このサイトビジットの成功は、日本政府観光局をはじめとする関係者の経済的なサポートを得られたことが大きかったと思います。

### インナーサークルの重要性 アジアにおける新たな役割

**川島** 松山理事長は官と民、両方のご経歴をお持ちですが、産業界にも精通したお立場で、わが国の国際会議誘致、またアンバサダープログラムについてのお考えをお聞かせいただけますか？

**松山** 長村先生のお話にもありましたが、選挙で決定される国際会議の誘致には国際団体のインナーサークルに入ること、つまり団体のキーマンたちと「How do you do?」ではなく「Hi!」で始まるコミュニケーションが誘致成功の近道です。アンバサダーの先生方には、世界の舞台でのますますのご活躍を期待しています。

またMICEは多岐にわたる産業、ステークホルダーで構成されます。こうしたMICEを支えるさまざまな産業分野、また多様なステークホルダーの連携が、新たなイノベーションやビジネス機会を創出し、それが日本の強みとなり、また開催地により高い効果をもたらします。そのために現在、産業としての「MICE」を確立していくためにはどのようなアプローチが必要なのか、また国としてどのような支援が必要なのかなどを検討しています。

**川島** 20年位前までは国際団体のインナーサークルには、アジアからは日本



長村 義之氏

人が圧倒的多数を占めていたのですが、最近はアジア各国に押され日本人の存在感が相対的に低下しているのではないのでしょうか？

**大西** アジアの国々の経済的な発展、また学問レベルの向上や多くの留学生を輩出する状況が、会議開催地、ホストとして信頼感を得て、誘致にも繋がっています。日本が突出していた時代から、たくさんの国が台頭してきた。これは時代の流れであり、それが日本のマーケットにもなっていることから、むしろ歓迎すべきだと思います。

先程、国際会議開催件数のシェア低下のお話がありましたが、さまざまな国・都市がホストのできる状況を、私は喜ばしいことだと思います。ただその中で、日本が担うべき新たな役割があると感じています。

日本は5割のシェア、数々の成功体験、さらに例えば「東京には御三家と称する素晴らしいホテルがある」と、ある時期に確立したパターンに胡坐をかいて、どうしたら外国からの参加者に楽しんでいただけるかといった開拓の精神を少し忘れていたのではないかと感じています。しかし最近MICEという新たな角度からコンベンションを見つめ直し、ホスピタリティにさらなる磨きをかけようというムードが全国に広がっていることから、新しい日本のホストの時代が来ると思っています。

先程の松山さんのお話にもありましたが、コンベンションは一つの産業であり、コンベンションを支えるハード、ソフト、人といったさまざまな要素を再考し、プロフェッショナルを育てて行くことが大切だと感じています。



松山 良一氏

**長村** 国際細胞学会の誘致には、インナーサークルに入っていることが、非常に重要なポイントとなりました。50年以上の学会の歴史の中で、先人の先生方も常に世界に向けて情報発信をされてきました。また昨年のパリ大会も、参加者は開催地フランス、アメリカ、そして日本の順で、積極的な参加もあります。さらに、バイス・プレジデントには必ず日本人が含まれてきました。インナーサークルに入っていなければ、誘致に必要な細かな情報、ピットするタイミング等を掴めません。大西先生がおっしゃったようにアジア、中でもアセアン諸国の発展が商業的にも学問的にも目覚ましく、特に病理分野では日本は必ずしも安住してられない状況にあり、努力して執行部に入ること、目に見えること (visibility) が重要と痛感しています。

**川島** 大西先生がおっしゃるようにアジア全体を考えるとやむを得ないことですが、同時に長村先生のお話のように日本としてはもう少し学会の国際化を進め、若い方々にも積極的に世界でご活躍を

いただきたいと思いますね。

**長村** 医師になってから「さあやるぞ!」ではなく、世界に向かって活動する、情報を発信する国民性を持つことが必要だと思います。

**松山** 国際会議の誘致には大変なエネルギーを要しますが、論文のような評価システムがありません。「日本へいらっしゃい!」と、世界に積極的な呼び掛けをいただくためには、誘致・開催を評価する工夫が必要だと考えています。またもう一点、ぜひ国際本部を日本に誘致したいと考えています。

**長村** 私は2016年より国際細胞学会の理事長に就任しますが、事務局はドイツにあります。IAC本部を日本に置くためには、日常のコミュニケーションレベルが英語にならないと難しいと思います。

また、論文発表は学問的評価を受けるために非常に大切です。私は、この学問的評価と国際会議の誘致を結びつけることが、アンバサダーの役割の一つかもしれないと感じています。


**大西** 日本学術会議では7つ程の国際会議を選定して開催します。国際組織が主催し、日本の学会はホストとなって受け入れの準備にあたりますが、国際組織で活躍する方と、国内で学会を支えていらっしゃる方が異なる場合があります。残念なことに、誘致の成功は国際活動に熱心な方のおかげだと敬意は払うものの、国内で学会を支えている方々



川島 久男氏

に、国際活動が熱心な方がきちんと位置付けられていないことがあります。長村先生が言葉のバリアに触れておられましたが、日本は国内で完結できる環境にあります。学会の発展のために「国際派」と「国内派」が相互に認めあうことが大切だと思います。

国際本部については、オランダなど小さな国もある意味で国策として誘致に乗り出しています。このような中、国際科学会議 (International Council for Science: ICSU) が、新しいプログラム Future Earth (持続可能な社会) を展開するために国際事務局を公募しており、日本学術会議では昨年9月に名乗りを上げました。応募が7~8カ国あったと思いますが、このうちのスウェーデン、フランス、アメリカ、カナダ、日本の5カ国がネットワーク式の本部というアイデアでまとめ、[国際事務局]の一翼を日本が担う可能性が拡大しています。単発で国際会議を誘致することも重要ですが、継続的な関係となる先の国際事務局が実現できれば、例えば事務局長も日本人にこだわらず海外から適任者を招いて、日本人と一緒に働



**MICE ANBASSADOR**

**MICEアンバサダー ロゴデザイン**

日本の伝統工芸である「千代紙」の彩りは日本の豊かな四季を「折り紙」の綿密な手作業は日本の技術力を象徴

折り紙の中でも最もポピュラーな折り鶴は、千羽鶴などからくる平和のイメージにも連動し、海外からくるゲストへの安全性と心配りを表現。

国際会議等MICEの誘致に関わる人々の思い=色を一心に受け、日本の顔として活動する「MICEアンバサダー」のシンボルとして、さまざまな色が組み合わさった一羽の折り鶴をモチーフとしました。

くといった経験を積むことで、真の国際化が進展すると思います。

### 国際会議を開催することの意義 求められる集いの効果の最大化

川島 たくさんのアイデアが出てきました。

ところで、松山理事長は「啓蒙」の重要性にも触れておられましたが、ここで「国際会議を日本で開催することの意義」という、原点についてお聞きしたいと思います。もちろん経済的な意義はよく知られていますが、長村先生はこの意義をどのようにお考えですか。

長村 日本に外国から多くの研究者が集まる国際会議は、日本の研究者にとっては国際社会と接点を持つ絶好の機会です。また世界に向けて日本の学識の実力を見せる機会にもなります。また日本での開催には、アジア各国からの参加が多いことも特徴で、アジア全体のレベルアップにもつながります。ほかにも医学系の会議では併設展示等を通じて、医療機器等をはじめとする日本の産業をアピールする機会にもなると思います。

川島 参加者、特に若い方々が一流の演者の講演を聞いたり、国際的な議論に参加したりして、学ぶ機会、いわゆるラーニング エクスペリエンスやネットワーキングの飛躍的な拡大が期待できるということ、日本での研究が思いのほか世界に発信されていないので、多くの発表を通じて世界への発信が果たせるということ、またアジアの方々への刺激とレベルアップに繋がるというお話ですね。

長村 おっしゃる通りで、トップレベルの発表だけでなく、日常の医療に関する発表や情報の交換は国際会議の果たす大きな役割です。

川島 長村先生がおっしゃるように、さまざまな国際本部への「なぜ国際会議を開催するのか?」という調査でも、「ラーニング エクスペリエンス」と「ネット

ワーキング」が2つの大きな理由に挙げられています。だからこそ、国際本部は「ラーニング エクスペリエンスを拡大できるか?」、「参加者がネットワーキングを拡大できるか?」という観点で開催地を選定し、観光要素は意外と低い順位にあります。国際本部は常に参加者のための「ラーニング エクスペリエンス」と「ネットワーキング」を念頭に、参加者=会員のメリットを確保し、会員の拡大を狙い、本部のメリット、組織の拡大をめざしています。大西先生は、このあたりをどのようにお考えですか?

大西 日本人は、「欧米に追い付かなければならない」、しかし「アジアの中では優れている」と、優越感と劣等感の狭間にいることが多いようです。欧米と比較して日本を卑下しがちですが、国際会議では「欧米でもこうなんだ」、あるいは「アジアでもこうなんだ」と、そこに優劣がないことを知り、研究に国境がないことを知る貴重な体験ができます。

先日、世界を一周して3つの会議に参加したのですが、機中に4泊、ホテルに3泊という忙しい旅でした。これでは、会議参加の楽しみも半減します。もちろん日本への国際会議に参加される方のなかには、ずっと前から日本で会議があることがわかっていたので日本各地の研究所を巡り、研究者を訊ねるなどの計画を立て、日本への訪問機会を有効に活用されているというお話も伺います。先程、長村先生が8年前に立候補し、5年前に決定したとおっしゃいましたが、6年くらいの期間があると、国際会議参加による日本への訪問を、日本を知り、つながりを深めていただく絶好の機会と捉え、十分な準備をい

ただけるのではないかと思います。

また「ラーニング エクスペリエンス」の重要性についてお話がありましたが、我々の会議は研究発表よりディスカッションが多く、これまでは報告と質疑応答でしたが、最近はグループディスカッション、ワークショップを行い、参加者が本音で語りあうことができるような工夫がなされています。このようにエクスカッションだけでなく、会議そのものを盛り立てる工夫が重要だと考えています。

### キャパと機能を持つ施設整備 開催サポートの仕組みづくり

川島 大西先生のご指摘は大変重要なポイントで、例えばスマートフォンやタブレット端末を活用したポスターセッションにより、会議の事前・事後のディスカッションを実現する、あるいはバーチャルな参加者も取り込んだハイブリッド会議など、国際本部も「ラーニング エ

### MICEアンバサダー プログラムについて

◆海外の主要国・都市では、国際会議等の開催適地としてのプレゼンス向上のため、国内外において影響力のある人材をアンバサダーに任命し、国・都市の広報活動や国際会議の誘致活動にご尽力いただいている。

◆わが国でも、国内外で影響力の強い有識者（研究者、産業界のリーダー等）にMICE誘致促進委員会委員（通称MICEアンバサダー）にご就任いただき、「日本の顔」として、国内外にMICE開催国としての日本の広報活動や国際会議の誘致活動に寄与して頂く。

◆MICEアンバサダーは、そのネットワークや影響力を活かして以下の役割を担うことを期待。  
・MICE開催の意義に関する普及・啓蒙  
・MICE開催地としての日本のPR  
・日本への国際会議等の誘致・開催の促進

◆観光庁・日本政府観光局（JNTO）は、MICEアンバサダーに対し、国際会議の誘致活動や、プレゼンテーション資料作成等の支援事業を実施。

クスペリエンス」を高めるための工夫、よりアクティブなディスカッションへの参加やネットワーク拡大を実現するための工夫を重視しており、セッションをより有効な機会へと進化させよう各国・各都市が懸命に取り組んでいます。

そこで、日本で国際会議を開催する上での強みや課題について、お聞かせいただきたいと思っています。

長村 一つは良い会議場、宿泊施設などがあることですが、限られていることが逆に課題にもなっています。国内学会でも3年前、国際学会は6年以上前から立候補しなければならないので、大きな都市には複数の大規模施設が欲しいと思います。

また私の経験でお話すると、誘致のための「チーム」ですね。これは大きな力になると思います。このチームづくりには日本政府観光局の役割が大きく、行政や民間を巻き込んだオールジャパ

ンの誘致チームは、日本が誇る「強み」だと思います。

川島 課題と言う点では、開催コストを補う寄付金集めはいかがでしょうか?

長村 支援をいただく形は、学会によって異なるのかもしれませんが。私たちは商業展示、セミナーのスポンサーをお願いしています。民間企業が参加者に「ラーニング エクスペリエンス」を与えながら、自社のプレゼンスを示す機会としての商業展示等をつくっていききたいですね。より多くの企業に展示会を活用していただくことで、「ラーニング エクスペリエンス」の機会も収入も増えます。今はアベノミクス効果で景気も上向きの傾向がありますが、ここ数年は大変厳しかったですね。

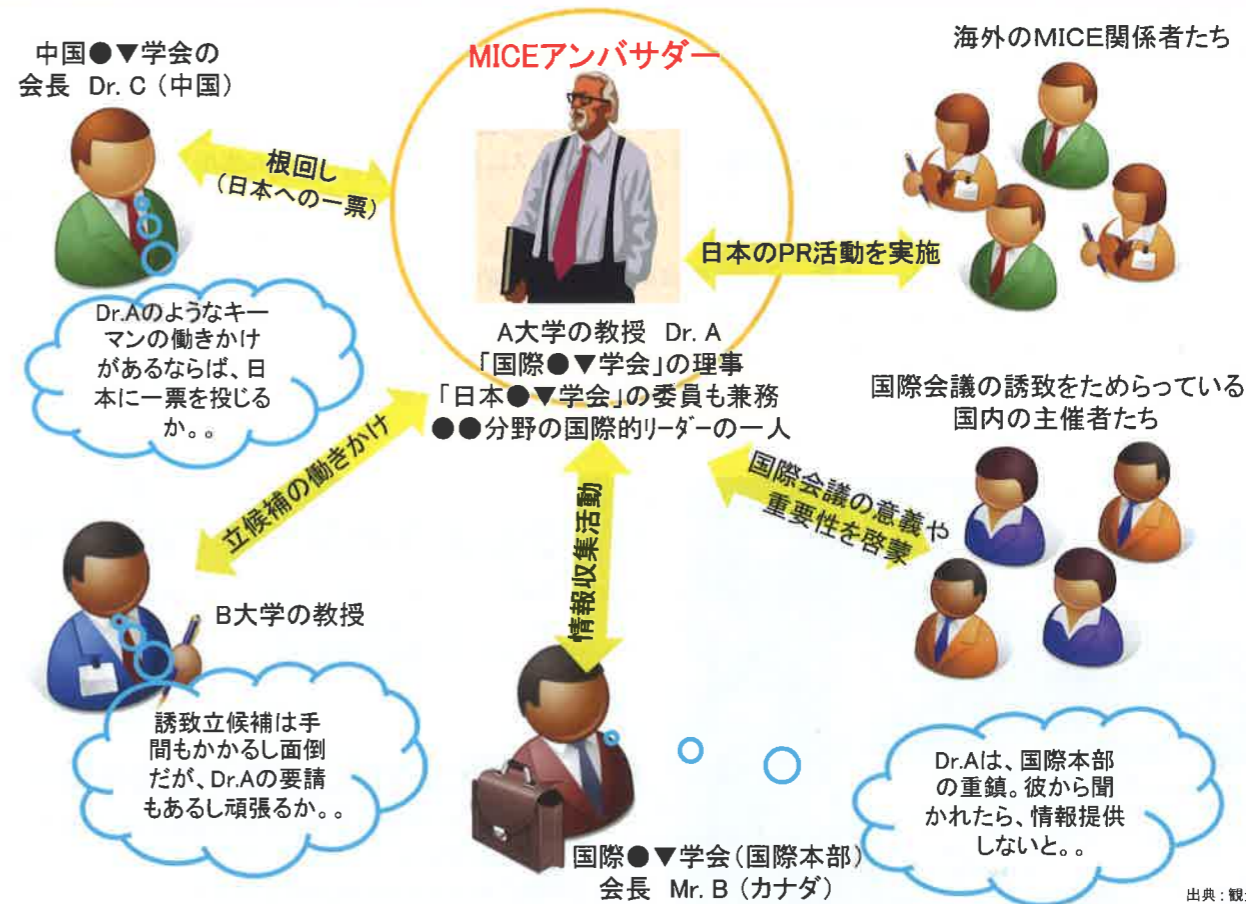
川島 大西先生は、日本の課題をどうお考えですか?

大西 私は国立の国際会議場が、東京地区にも欲しいと思います。国立京都国際会館は非常に素晴らしく、海外からの評価も高い会議場ですが、少し手狭です。また設計を手掛けられた大谷 幸夫先生は、段差による景色の変化を設計デザインに活かされ、それが国立京都国際会館の魅力にもなっているのですが、現在の視点では「バリアフリーではない」という見方もあります。

2020年の東京オリンピックの跡地を活用するなど、新たな国際会議場を整備するアジア諸国に伍する十分なキャパシティと機能を備えた国立の国際会議場が欲しいと思います。

川島 海外では、大学の中に宿泊施設まで備える素晴らしい会議施設があります。

大西 日本では早稲田大学が国際会議場を整備していますが、海外では一流





ホテルそのものが大学のキャンパスにあるという感じです。

**川島** 海外では大学の施設を使うことでコストをセーブできますが、日本ではどうしても学外の施設を使わざるを得ず、そのために寄付金集めなどのワークロードが増えます。論文の受付や登録の受け付けなどを学内の事務局が手伝ってくれるシステムがあるとよいのですが、日本にはこれありません。

**長村** ずいぶん前、日米合同の会議を夏休みのワシントン大学で開催しました。我々はドミトリーに宿泊し学内で会議を開催するのですが、大幅なコストセーブを図ることができましたし、大学は夏休みで使っていない施設の活用で収入を得ることもできます。また大学に、会議をサポートする事務方の部署もありました。

**川島** 日本には国際会議の主催者となるレベルの高い先生方の層が厚いにもかかわらず、日本での国際会議の開催件数が比例していないのは、「国際会議を開催するのは大変だ」と、ひそかに開催をお断りされているケースが少なくないと考えています。大学内に会議開催をサポートいただける施設や仕組みがあれば、会議開催をお引き受けいただきやすいのではないのでしょうか。

**長村** 大学だけでなく産業界の支援があれば、仕組みづくりがスムーズになるのではないのでしょうか。

**大西** 日本学術会議には、1階に350名程度を収容する講堂を持っています。稼働率は高いのですが、使っていない時間がないわけではありません。空いてい

るなら「有料で貸し出したらどうか」と提案したのですが、国立の施設で「ビジネス」はダメだそうです。

これは会議のために会場が必要と言う考えですが、会場に着目すれば多様な会議の開催、多様な使い方を模索するでしょうし、そのためのサービス提供が必要になります。高効率な会場・会議運営はプロフェッショナルな仕事であり、こう考えると日本学術会議本体とは独立した運営を考えることも必要にひとつのアイデアかと思えます。

**長村** 日本には「手弁当の美德」のようなものがあり、研究者が懸命に取り組むことがあります。国際会議の誘致拡大のためにはお話にあるような「仕組みづくり」が必要でしょう。

**川島** 最後に、松山理事長に今後の展開についてお聞きしたいと思います。

**松山** アンバサダープログラムは、国際会議誘致のために都市単位で有効活用できるプログラムです。今回、ご就任いただいたアンバサダーの先生方のお声を拝聴し、またご協力も賜りながら、まずは国がモデルを示し、都市レベルでのプログラム活用気運を促したいと思えます。また今後は女性の登用、また産業としての発展を期すために産業界からのアンバサダー登用を実現していきたいと考えています。

**川島** ありがとうございます。

## MICE アンバサダー

(五十音順、敬称略)



### 池田 康夫

早稲田大学理工学術院大学院先進理工学研究科 教授。慶應義塾大学 名誉教授。2011年震災後にもかかわらず国際血栓止血学会（参加者：約6,000名、開催地：京都）を成功裏に開催。その実績によりIAPCO（国際PCO協会）から2011 IAPCOアワードを受賞。国際内科学会会長。



### 大西 隆

内閣府日本学術会議 会長。慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特別招聘教授。東京大学 名誉教授。都市計画・地域計画が専門。国土交通省の国土審議会 政策部会 長期展望委員会の委員長、新たな「国土のグランドデザイン」構築に関する有識者懇談会の委員も務めている。



### 長村 義之

国際医療福祉大学 病理診断センター センター長。国際医療福祉大学 大学院 教授。東海大学 名誉教授。国際細胞学会 次期理事長。積極的なロビー活動により、2016年の国際細胞学会（参加者：約5,000名、開催地：横浜）の誘致に成功した。



### 木村 正

大阪大学 大学院 医学系研究科 産科学婦人科学講座 教授。附属病院長補佐、総合周産期母子医療センター長、産科長、婦人科長を務める。専門は生殖医学、産科学、婦人科学。国際産婦人科連合（FIGO）日本代表理事。アジア・オセアニア産婦人科連合（AOFOG）日本代表評議員も務める。「日本内分泌学会研究奨励賞」「日本生殖免疫学会賞」などを受賞。生殖医療専門医、婦人科腫瘍専門医。



### 小宮山 宏

(株)三菱総合研究所 理事長。東京大学 総長顧問。プラチナ構想ネットワーク会長。化学工学、地球環境工学を専門とする工学博士。2005年に東京大学総長に就任。2009年より現職。著書に「日本「再創造」」(東洋経済新報社2011年)ほか多数。



### 水澤 英洋

東京医科歯科大学 大学院 脳神経病態学分野 教授。(一社)日本神経学会 代表理事。2017年 世界神経学会議（参加予定者：約7,000名、開催地：京都）の誘致に成功。文部科学省の脳科学研究戦略推進プログラムの拠点長や戦略的創造研究の研究代表者、厚生労働省のプリオン病研究の研究代表者などを務める。



### 宮澤 陽夫

東北大学 大学院 農学研究科・農学部 教授。(公社)日本栄養・食糧学会 会長。国際栄養科学連合 (IUNS) 理事。国際メイラード学会 (IMARS) 会長、日本過酸化脂質・抗酸化物質学会会長、アジア栄養学会議 (FANS) 常任理事等を歴任。2015年第12回アジア栄養学会議（参加者：約4,000名、開催地：横浜）、および2021年第22回国際栄養学会議（参加者：約4,500名、開催地：東京）を開催予定。



### 山谷 泰賀

独立行政法人 放射線医学総合研究所 分子イメージング研究センター、先端生態計測研究プログラム 生体イメージング技術開発研究チーム、チームリーダー。2012年ドイツ・イノベーション・アワード「ゴットフリート・ワグネル賞2012」最優秀賞受賞。



## 皆様を心よりお待ちしております

財団法人金沢コンベンションビューローでは、開催されるコンベンションの内容・規模や計画進捗に応じて、各種支援メニューで皆様を支援致します。

### 財団法人 金沢コンベンションビューロー

〒920-0918 金沢市尾山町9-13 金沢商工会議所内  
TEL076-224-8400 FAX076-224-6400  
URL <http://www.kanazawa-cb.com>

写真提供：石川県・金沢市



人が紡ぎ  
人が奏でる  
人が感動する MICE!

<http://www.convex.co.jp>

## CONVEX

CONGRESS ORGANIZER

- コンベンション & イベント運営企画・総合管理
- 音響・映像・照明制作管理
- グラフィックデザイン・印刷・デジタルコンテンツ制作
- 語学サービス
- 国内・海外スピーカー派遣
- エンタテインメント・プログラム制作
- トラベル・サービス

株式会社コンベックス  
〒106-0041 東京都港区麻布台2丁目3番22号  
TEL: 03(3589)3355 FAX: 03(3589)3974  
email: info@convex.co.jp